

Title	これまでの私の研究とこれからの病理学講座の展開
Author(s)	松坂, 賢一
Journal	歯科学報, 121(2): 170-170
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10130/5492">http://hdl.handle.net/10130/5492</a>
Right	
Description	

## 講演抄録

## 特別講演 1

## これまでの私の研究とこれからの病理学講座の展開

東京歯科大学病理学講座教授 松坂 賢一

ヒト下顎骨緻密質の走査電子顕微鏡を用いた形態学的観察を解剖学大学院で行ったのが私の研究のスタートであった。病理学講座に所属を移し、実験病理学的手法や病理検査標本を用いた研究を行ってきたが、当初免疫組織化学的染色が先端的であった手法が、25年余りを経た現在では、ルーチン化した方法になっている。さらには、形態学研究のみならず遺伝子やタンパクなどの機能的解析も必要不可欠である。これまで、様々な方法を用いて生体材料に対する細胞動態や歯科インプラント周囲組織の解析、歯根膜細胞の動態解析、口腔病変の病態解明を行ってきた。この中で、歯根膜は歯科医学にとって特異な組織で、硬組織形成能を持つ細胞が存在するにもかかわらず、歯と歯槽骨は硬組織で結合することはなく、ある一定の幅が維持されている。歯根膜組織は線維芽細胞や骨芽細胞、セメント芽細胞、血管内皮細胞、マラッセの上皮遺残細胞など多種細胞からなっており、ある時は石灰化が促進し、ある時は線維の形成が亢進するといったように、それぞれが協調するようにはたらいっている。本講演では、様々な刺激を与えることによって、歯根膜に存在する細胞がどのように反応するかについてこれまでの研究の概要を述べる。そして、現在、本講座で進行中の研究として、口腔扁平上皮癌細胞に特有な浸潤機構の解明、歯肉性腫瘍および唾液腺腫瘍における病態関連因子の網羅的解析、口腔粘膜の炎症性疾患の病態解明、ジルコニアに対する光機能化における細胞動態を検索しており、これらについて紹介する。

病理学は、病（やまい）の理（ことわり）を探求し、病因と発生機序から病態を解明する学問である。病理学・口腔病理学の学生教育において、病態、病理用語の正確に理解することに始まり、次にその病態を視覚的に取り入れることによって確実な知識にする。その先には診断、治療評価、予後の判定とつながってくることは言うまでもない。本学が所蔵する莫大な病理標本を有効に利用して、学生および教員教育を行っている状況と水道橋病院臨床検査科における病理診断業務についても触れる。

## 《プロフィール》



## ＜略歴＞

1990年3月 東京歯科大学卒業  
 1994年3月 東京歯科大学大学院歯学研究科修了  
 （解剖学専攻）  
 1994年4月 東京歯科大学病理学講座助手  
 1999年10月 東京歯科大学病理学講座講師  
 2001年7月 東京歯科大学臨床検査学研究室講師

2004年10月 東京歯科大学臨床検査学研究室助教授  
 ・准教授

2011年4月 東京歯科大学臨床検査病理学講座准教授

2015年5月 東京歯科大学臨床検査病理学講座教授

2020年4月 東京歯科大学病理学講座教授

## ＜資格＞

死体解剖資格認定医（病理解剖）、日本病理学会口腔病理専門医、口腔病理専門医研修指導医、日本臨床細胞学会口腔細胞診専門医、日本口腔インプラント学会基礎系指導医、日本心理学会認定心理士、日本口腔検査学会認定医

## ＜所属学会＞

日本病理学会、日本臨床口腔病理学会、歯科基礎医学会、日本口腔インプラント学会、日本口腔検査学会 他